

生業動態からみた先史時代の ニホンジカ狩猟について

小 池 裕 子

-
- 1. 生業動態分析について
 - 2. 生残率・捕獲限界および狩猟率の算定につ
いて
 - 3. 咬耗指数にもとづく年齢査定法の検討
 - 4. 遺跡出土ニホンジカの年齢構成と狩猟率
-

論文要旨

- 1 1984年の豪雪で大量死した日光ニホンジカ現生標本を用いて、ニホンジカの外部観察による齢査定法を検討した。その結果、近畿産ニホンジカで設定された咬耗指数による齢査定とは、若齢期では捕獲期のちがいによると解釈される程度の咬耗差であったが、老齢化すると日光産のシカが若干咬耗の進行が速い傾向がみられた。
 - 2 咬耗指数から年齢構成を復原する方法、生命表の作成、生残率・狩猟率の算定などを検討した。先史時代のようなシカ狩猟が全般的に活発な状況下では初期死亡率が比較的小さいものとして、非狩猟下の個体群の生残曲線をシミュレーションした。
 - 3 19遺跡について推定されたニホンジカの年齢構成をもとに生命表を作成し、生残曲線と生残率・狩猟率を推定した。その結果、生残率が0.8前後を示す狩猟率5~7%台の遺跡と、生残率が0.75前後で狩猟率が10%をこえる遺跡とが、ともに縄文時代から検出された。前者はシカ資源に余裕がみられる状況にあり、後者はシカ資源が捕獲限界に達したものと考えられる。
-